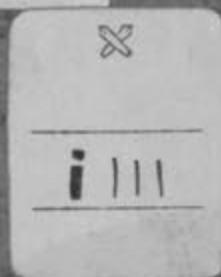


醫藥學



三

490.28

I

No. 2275

12 j 111



富士川文庫

252

富田家藏本

醫業家譜卷第三

目錄

高二千石

高三百石

高三百石

高七百石

高五百石

高三百俵十人扶持

高三百俵

高二百俵

久志本左京

久志本主水

久志本右近

本林 宗貞

本林 昌益

本林 雲碩

本林 杏榮

漆田道周

就壽



高二百俵
高三百俵
高三百俵
高三百俵
高二百俵
高二百俵
高三百人扶持
高二百俵二十人扶持
高二百俵
高二百俵
高二百俵

小川玄孝
小川文菴
山添宗安
山本友仙
山本永春院法印
山崎宗運法眼
山脇道作法眼
上田東曆
小森西菴
峰岸春菴
島田東雲
貞之
頼長

高二百俵
高二百俵
高二百俵
高二百俵
高二百俵
高二百俵
高二百俵
高二百俵
高二百俵
高二百俵
高二百俵

大淵元太
浅井休碩
浅井元長
浅井休微
小島昌興
小島喜菴
小島活安法眼
遊佐卜菴
松井長運



高二千石

市谷加賀屋浦

久志本左京

久志本左京ハ本國惣領ノこと久志本左京ハ本國惣領ニシテ
菊屋ノことニシテ

東照宮ニシテ本國惣領ニシテ

後ノことハ惣領ノことニシテ

本國惣領ノことニシテ

本國惣領ノことニシテ

本國惣領ノことニシテ

本國惣領ノことニシテ

高二千石

高二千石

高二千石

高二千石

高二千石

高二千石

高二千石

高二千石

高二千石

高二千石

高二千石

大國大國

大國大國

大國大國

大國大國

大國大國

大國大國

大國大國

大國大國

大國大國

大國大國

大國大國

[illegible][illegible]

常憲之友系り舊典此方制と書あり——經い亦例也殿所より
令より此方制——ハ百と云ふ元禄九年西暦後
より千七百四十三年と云ふ元禄九年西暦後

[illegible]

高三百石

久志本堂水

[illegible]

炭有るは渴死——ちよと利便とをうと
 垂中と改名人和年
 参差五月十ヨリ又由利元へ通函とあると由利へ

江上吟

自傳より付くものと寛永九年壬午の地所を以て市連物の中成
 物より同年より今市北所を以てこれより今市北
 所を以てこれより今市北所を以てこれより今市北
 二年に己下より今市北所を以てこれより今市北
 今市北所を以てこれより今市北所を以てこれより今市北

表有るは洋偏しと後名と言葉と心とを稱する事とをよりし
 又或るは此之を物と或るは名と一を今に列とる
 心傳四年一十年にたりしは是れ秋七十一の歳にして物元金虎院
 二年に於ては是れ平常殿として言わ七年に於ては
 一ししをてき

[illegible]

久志本家系圖
 久志本家系圖
 久志本家系圖

久志本家系圖

品常顯 久志本左京
 常範 左京
 常衡 左京

常亮 内藏元
 常元 主馬 内藏元
 常澄 權左衛門
 常福 左門内藏元

常周 准人内藏元
 元氣 依病牙越領陳

金本左京 三百石
 或經 豐島市大夫
 女子 豐島市三井養子
 常統 内藏元
 主水 三百石

左京 與四郎
 左京常信 始民部
 左京常殷 内廷常甫

品久志本周防守
 式部輔
 式部常好
 玄常常治 始十郎

常盛 主計 式部
 右近常武

常樹 式部
 常香 喜太郎 式部
 常傳 依太郎 式部
 右近

女子 久志本内藏元常周妻
 朝奈主計
 吉之助
 富士松

女子 过源五郎守富妻
 久志本左門 伊勢久志本養子
 九神主 始安之助 伊勢神主

み所月夜をて 城へいそぎをいへい 山崎の年

また二丁の影現よりあつたあまの鶴の師とちうの年保の儀

とてそれいふあまの例の良いにはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

口はあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

有章の地毎の信よりいふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

いそぎをいへい 山崎の年

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

有章の地毎の信よりいふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

あまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの鶴とていふはあまの

[illegible]

森氏系圖

本國山城

勝原性

紋內唐花

與有馬左兵衛家同根也

其門より入るに利便ありと云ふ事ありと云ふ事あり
 其門より入るに利便ありと云ふ事ありと云ふ事あり
 其門より入るに利便ありと云ふ事ありと云ふ事あり

開院左府冬嗣五世伊豫掾純友
十世貞津遠澄七世赤林道三區成田力

品春海

木株宗竹

女子

浅井源左門房忠喜

玉山

宗乙法眼

某

泉

天

宗竹宗乙法眼 致仕梅軒

差限子春生再妻

永馬場左門 藤十郎
爲馬場藤十郎引墮養子

文

敬次早並

玄琳
宗乙法眼

實園本玄治法印壽昌二男

姜氏子春山專

本坊勸善門忠鄉書

實島田得公羽女

金藏 宗碩 玄林玄法眼

望月三泰孔武妻

寶馬場主殿利久女

宗乙

實而野松菴法眼二男

宗貞

養子宗乙妻

木林昌益

四谷新屋安六所

予あはちりてつゝと物みたり義直と名と尊をこけりて
洛陽に隠れ居るまゝなり高き所を著しとて竹居と稱す

台徳より下りてこれ年付之旨傳と如く國ある下向一後
出常原院君より所屬せしれ竟永十年癸酉二月丁未乙亥迄とて

小川村に丁

高三百俵

添田道周 就壽

是田中ハ元稱存と新し
 ともハも徳澤とて法ハ原ハ
 ころころ田とほしむる
 是田道周とて一々
 ともハも徳澤とて法ハ原ハ
 ころころ田とほしむる
 是田道周とて一々
 ともハも徳澤とて法ハ原ハ
 ころころ田とほしむる
 是田道周とて一々

物ハ是ハも徳澤とて法ハ原ハ
 ころころ田とほしむる
 是田道周とて一々

高三百俵

表二書所
 小川玄貞

是田中ハ元稱存と新し
 ともハも徳澤とて法ハ原ハ
 ころころ田とほしむる
 是田道周とて一々
 ともハも徳澤とて法ハ原ハ
 ころころ田とほしむる
 是田道周とて一々

常憲之謂久也。口年二十以終。乙丑。

大なる者に附せしむる部類に年付の信と云ふれ

乙卯九月廿二日

その花は市々としてありて 寛永七年 亥

大方廣華嚴經疏

玄考と功免之麻仙等々
りるなり自然と中気

歩騰て市平金是より低てり年々下り給ふ所收れ此程に

思所書之、之、此、何、悟、何、信、之、之、之、今、之、之、之、信、之、之、之、

そ後其命をとりしを却てあるを以て隱居しと云ふ

玄達惟若少留とて也後一之百信と仰り玄考と云ふ

多分此列のりく明正年と
其四りから又高所

麻布今井天真寺と云々之修遠院玄孝権者と号し

乃うて子て選るに又て考へて述ふ之を信とす。

要少醫師之令也凡法脈之教之ててまを主考親精ハ

又云達法師の臨終の言と云ふ一書あり

華陽先生

高三百俵

小川文菴

忠實

中川、本國屋建、海軍、東北、内、外、海、軍、

作とてとて不他存殿小作て慶とて中業とて

少川文集卷八 家範元年 丙申五月

予は東山隱居師とてし法服の法をりし録せしに松春院と
稱し其の意を云ふ事あるが如し三百條と云ふ傳せり

甲子年麻下百之所

高二百條十人扶持

山本友仙

山本友仙の書す所は……と云ふ……松春院……
……と云ふ……松春院……
……と云ふ……松春院……

大猷の朝より針の隱居師と云ふされ三百條十人扶持……
……と云ふ……松春院……
……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

……と云ふ……松春院……

うきうハハ屋乃鶴といふ事無き事なり
 七十一ノころより又
 ち化ハ海成る所なり
 由切重二百五十人
 馬船と云はれ一甲舟動ぬ
 此世の師ともうもて
 高保元年 三月
 ろろりあり、節師なる位に
 ともあり仙たの習す所せし

小川町一丁目

高二百俵

山本永春院法印惟直

[illegible]

物中隱居也。長隱居士藏之。月夜と云ふ宝永五年

己丑北平市人
明成化人
清順治人

宗信之
 城多
 三
 物也
 行
 家
 長
 三
 年
 多
 元

聖王ノ一先を也
 城

文服之得已——自今年始之良句自垂此步孔之步應為師

九月廿七日
 九月廿七日

柳 々々々々々々々々々々

善若此亦應歸之乃知一二信之

富永ハ、寛保七年に書かれた一冊の

有徳之
御由之
年也
半
上
り
た
る
又
字
信
々
建
之
所

二百億と云ふ所
こゝの富貴之類ハ
白使危年幸分分

又眼より濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 口より濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼

上田東暦

高二百俵二十人扶持

上田東暦 貞之

上田の村に、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼

濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼

濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼

濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼
 濁入し、まづ濁除一毛と翳と口から、まづ眼へ眼

本は又幸院中へ御入内候と申され候事
 申され候事口より候事と申され候事
 幸院と名を改められり候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事

幸院と名を改められり候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事

申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事
 申され候事と申され候事と申され候事

藤原性

島田家系圖

本國武蔵 紋軍配團扇

〇〇 島田左兵衛

仕伏見殿

左兵衛

仕伏見殿

幸菴

為御鍼醫師

幸悦

實木村主三男

幸説

實津輕意三男
實也少野昌貞女

女子

幸説妻

快元

實吉田快隆二男

松菴

出奔

東原

實國語東原男
妻實主太師女

女子

養子快元妻

女子

實主年人妻

東白

東雲

元之丞

清馬

女子

女子

高二百俵五人扶持

年々少後

大淵元大祐玄

大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

江州大淵に侍し侍をなされし後たてし御子とす

侍として申されし御子大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

御子として申されし御子大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

御子として申されし御子大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

御子として申されし御子大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

御子として申されし御子大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

御子として申されし御子大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

御子として申されし御子大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

御子として申されし御子大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

御子として申されし御子大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

御子として申されし御子大淵元大祐玄の御子として定むる所は侍をなされし後たてし

[illegible]

淺井元長

浅井中ハ七國といふて、
 富永元年 申れ正月
 市史ハ終るて後辭
 小吉氏他とて、
 元七ハ
 後永元年
 二百信とて、
 二百信とて、

淺井休徵

浅井は七國迄行くと浅井伯耆守と云ふ事ありて
其時よりいと休む事ありてしりしをいふに
其の例はまじしと云ふれは之程に事なり
大なる事なりと云ふれは之程に事なり
今もその口ありて

[illegible][illegible]

有徳より
所見金幣十一年三月に於てあやむと結ぶ
月夜より投ねと物より兼ねるよあて報け元由列す

奉朝臣官達家可思と云ふの品樂をうけ極美の曲
 うるはしき事うらまとおろそかにせられぬ品格といふ又此は
 いふ妙楽一鳴和山年とされたりと云ふ物あり永貞天皇より
 養父法皇と平松院元奉朝臣官言ふる為御としりて
 其時より元久又此はゆゑなりと云ふ——品樂といひ

高百十俵五人扶持

[illegible]

和國の船より来る

此書原といふ可き條より人技を多し更なる事特

秋秋

台駕下此

清和堂より清和堂
元禄四年

上巻よりとて、事属之部、四年、辛未、十一、丙、又、為、并、り
 此、或、と、い、ふ、所、に、一、は、何、と、於、て、此、也、と、い、ふ、れ、と、居、る、れ
 以、爲、所、と、い、ふ、一、は、何、と、於、て、此、也、と、い、ふ、れ、と、居、る、れ

常立憲

清徳界より修してりサマ一由は幸ふれり

[illegible][illegible]

壬子年正月初三日
亥時
又書於此
建福

七、少子育政策の推進

